

山と博物館

第44巻 第8号 1999年8月25日

市立大町山岳博物館



「夏雲踊る」 北アルプス涸沢にて (8月)

撮影 大石高志

雲

飯島紀子

暑い！山の冷気が恋しい。せめて夕立でもと雲をさがす。「雲」というと一番先に頭に浮かぶのはハイマツの中で寝ころびながら飽きもせず眺めていた雲である。

青空に白く ぽっかりと浮かぶ雲
ゆっくり風に流れ いろいろなかたちに
かわっていく—
あきることのない おもしろさ

鹿島槍ヶ岳の山小屋でアルバイトをしている友人達に無線で入る差し入れのリクエストの物(もっぱら食物であったが)を届けてはハイマツの中で雲を眺めていた。

爺ヶ岳に雷鳥調査のために入った山岳博物館の人達に餃子や肉の差し入れに登っては下山の時間まで雲を眺めていた。

あのとき調査に入った人達の中から後に二人の山岳博物館・館長が誕生し、退職されたのだから遠い昔のことになる。

大好きな山、鹿島槍ヶ岳は青春そのもの。先輩に連れられ登った山もいつの頃からか単独行になり、それぞれの山行に懐かしい想い出がたまっている。

最近の登山ブームは若者より熟年といわれる年代の、それも女性が多いが以前は全く逆で、黒部峡谷の「下の廊下」を歩き阿曾原の山小屋では、若い女性が来てくれたと黒部川で釣った岩魚を焼いて歓待してもらったり、熊・猪・兎の肉の味や山菜の美味しさも山小屋で知った味である。今考えても最高にぜいたくな時を過ごしたものだとおもう。

どうして若い人の登山者が少なくなってしまったのだろう。忙しい現代では時間の余裕がないのだろうか。雲を眺めることすらぜいたくなことになってしまったのか。

自然の中で知る楽しさ、恐さ、感動、喜びは何物にもかえがたい財産と信じている。

(大町市在住)

中部山岳鳩協会の思い出

沼田

泉

昭和十五年(一九四〇年)といえは五九年前になりますが、そのころ私は旧制中学の五年生で県立大町中学校(現大町高校)に通っていた。確か五年生になったときだったと記憶しているが、ある日担任の鈴木先生から「駅前に中部山岳鳩協会(注一)があるのを知っているだろう。実はその責任者から鳩の世話をしてくれる生徒がいたら紹介してほしい」といってきている。誰かいないだろうか」との話があった。当時は日中事変が勃発して三年経っていた。東京にいて鳩協会の経営している方は、二、三年前に私財を投じて登山者の遭難を防止するために伝書鳩(注二)を利用する中部山岳鳩協会をつくったのだった。しかし、戦争が長びくにつれて財政的に問題がでてきたために専門の協会員を雇用することはできなくなってきたようだった。

当時、私は鳩協会の近くに住んでいたため、私には数人の者が協力することになった。今でも脳裏に焼きついていて、鳩協会の建物は、三階建ての瀟洒な白い建物だった。田舎の町では目についた。しかも駅前の登山者にはすぐ目につくので、おそらく世話になった登山者は多かつたであろうと思う。建物は、玄関をはいったところが事務室になっていた。いわば鳩協会の中枢である。その奥が六畳くらいの日本間で管理者の生活する部屋だったように思う。キッチンなどのスペースがあり、勝手口(裏口)があった。私たちは鳩の入口から出入りしていた。二階部分は、鳩のための物品や飼料の倉庫、その他の資材置き場になっていたのだと思うが、あまり入ったことがなかったので覚えていない。

さて、鳩の世話をするようになったが、記録がないので思い出すままに記していこうと



①鳩舎と伝書鳩 建物の3階は鳩舎になっていた

思う。当時の写真が一枚残されているが、誰が撮ったのかは分からないが、鳩協会の建物の鳩舎(三階)部分がわかると思う【写真①参照】。上に鳩の運動をさせるときに赤い旗を出しておく四階に当たる部分が見えるが、旗が見えないで鳩が群れ飛んでいるのは、運動が終わって赤旗を取り込んだので自分たちの巣へ入るところのようである。遠くに白雪の山が見えるのは、爺ヶ岳か鹿島槍ヶ岳の角である。季節はおそらく私たちの卒業のころになった三月ごろに記念のために撮ったものと思われる。建物の右手の方は、駅前の大通りで、左の方の裏には今はないが二メートル幅の川が流れていた。近くに秋葉様と呼ばれていた小さな神社があった。大通りの向う側には、以前高瀬川の溪谷にあった水力発電所へ資材などを運ぶトロッコ電車が走ってい

た頃の狭い線路がまだ敷かれたままになっていたように思う。トロッコは、町の大通りの真ん中にあつた線路を北に走って、若一王子神社の南の方を曲がって、野口を経て高瀬川に沿って発電所へ向かつていたと思う。私たちの子どもたちは、すでに町中の線路はなくなつてしまつた。確か小学校の高学年のころには、大通りは舗装されたことを覚えていた。昭和初期の大町は、町も大きくなかった。周囲は田圃や畑だった。今の昭和電工や東洋紡績工場(できた頃は、呉羽紡績だった)ができたのは昭和の初めである。

鳩の世話について教えてもらったのは、おそらくそれまで世話をしていた方だつたと思うが忘れてしまつている。とにかく毎日登校前に餌を与えることや鳩の部屋の掃除をする、掃除をする間に鳩の運動をさせた。運動をさせる間、竿の先につけた赤い旗を出しておく。鳩はすでに訓練されたので旗が出てくる間は、群れは馴れ馴れしい空を飛んでいるのだが、中には電柱にとまったり、家の屋根にとまって羽を休めている鳩もいた。これがないように赤い旗を振つたりして運動をつづけさせたものだ。掃除が終わると

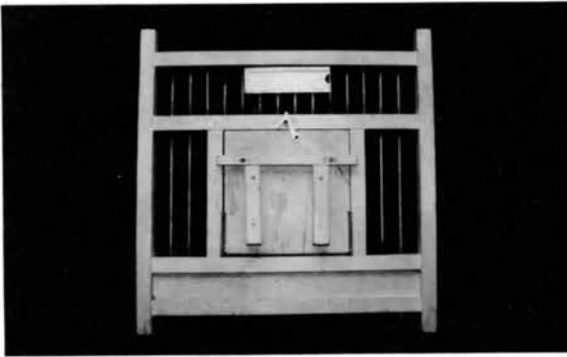
鳩舎に入れるわけだが、最初の訓練のときは、旗を入れると同時に合図の笛を吹くのだが、慣れていたので旗を入れると我先に入り口からはいつてきたが、それは凄まじいものであった。早く餌にありつきたいということである。

私たちは学校がある日は、下校後掃除をすることが多かった。鳩舎は、日本間でいうと八畳くらいの部屋が二つあつた。床はコンクリートびきになっていて、部屋の周囲には風呂屋の脱衣入れと同じような柵形の鳩の巣が、天井から下まで並んで壁際に作られていた。鳩はその中で休むようになっていた。数は忘れたが一部屋に二〇〇羽くらいはいたと思う。鳩が入ってくるころは、鳩舎には箱型の部屋ができていて、アルミ(軽い金属)でできていたと思うが、ちょうど鳩の頭が入るくらいの幅で幾筋も垂れ下がっていた。箱型の周囲ももちろん同じである。外からは見えないが、中からは出られないような長さになっていた。箱の大きさは、一メートルくらいの幅で高さ三〇センチ、奥行八〇センチくらいのものだったと思う。その箱の床面は薄い板状のものが敷かれていて、鳩が山などから戻つてきてここに入ると、事務室に知らせようになつている配線があつて、鳩の重さによってベルが鳴る仕掛けになっていた。ベルが鳴ると係が鳩舎にかけ上がつていて、足に通信筒をつけている鳩をとらえて、通信してきた紙をぬきとることになるのだ【写真③参照】。



②鳩飼育者と伝書鳩 鳩舎での1コマ

③参照】。



④鳩舎内鳩個室出入口扉 (45×43cm) 木製(格子部分は金属)で扉は手前に90度開閉



③鳩使用箋 山からの通信にはこの用箋が使用された

運動をさせる場合は、箱型のアルミの棒をあげて、そこから鳩を出すのだ。掃除は、床に付いている糞を削り取ったあと、水をかえ、嘴をとぐレンガ状の石をいれる。鳩の糞の匂いは一種独特のものである。初めは気になったがやがて慣れてくると平気になった。餌をやるときに部屋に入ると、床に撒くのもおそろいのでたいへんである。餌は、トウモロコシのほかに穀類を混ぜたものであったと思うが、くわしいことは忘れてしまった。

月日が経つにしたがって作業にも慣れてくるにつれて、鳩たちが可愛くなって鳩協会に行くのが楽しくなっていた。学校が終わると協会へ急行したものだ。友達もきたりして多少は手伝ったりしたが、次第にたむろする場所にもなった。やがて私人が作業をするようになっていった。仲間が遊びにきたときには、現在でもあるが「昭和軒」から美味い支那そばを配達してもらって、談笑にふけたことも度々あった。費用は自分たちの小遣いだったのか、ある程度の費用は認められていたのか不明である。初めの頃は餌が時々東京から送られてきたようなので近くにいる人が管理責任者を依頼されていたらしい。今になって考えてみても、その方の顔を出し出すことはできない。

夏頃になって私たちが登山に行くのに鳩を連れて行って飛ばしたこともあった。鳩の足にはアルミの通信筒(二、三センチの長さで、直径が五ミリくらいだったと思う)がつけられていて、その中に通信文を書いた薄い紙を入れるようになっていた。下山してから鳩が帰っているのを見つけると嬉しかったものだ。鳩を運ぶときは、木の「つる」で作った籠にいれていった。籠はたくさん運ぶときと、二、三羽くらいいれる大きさのものがあつたように思う【写真⑤参照】。

安曇野の冬は早い。北アルプスの山々に雪がくるようになって、寒さが肌に感ずる頃に



⑤鳩籠 右から2人目が背負っているものと手に持っているものが鳩籠。これら複数の鳩を持ち運んだ。(左端：三田旭夫氏、左から3人目：百瀬慎太郎氏 中部山岳鳩協会はその事業を行うにあたり、大町登山案内者組合から協力を得ていた)

思って、家から餌になるようなものを持っていったこともあつたように思うが、それくらいではどうしようもない状態だった。年を越すことによい私は卒業を迎えることになった。東京の学校へ入学することになったので、一応お手伝いの作業を終えることになった。後ろ髪を引かれるような思いで上京したのは四月のはじめだった。その年の三月に、三日町の大火があつて殆どの家が焼けたのを今でも思い出すことがある。仲のよかった友人の家も灰燼となつてしまった。昭和十六年(一九四一年)のことであり、その年の十二月八日に真珠湾攻撃があり、アメリカとの戦争が始まったのだ。

(大町市出身、幼児・児童教育研究者・全国・東京都小学校道徳教育研究会顧問)

(注一) 中部山岳鳩協会：山岳遭難の多発を憂慮した三田旭夫氏(東京都出身)が、その防止のために伝書鳩を利用した山岳通信を考案して昭和十一年に設立。北アルプス登山の玄関口である大町駅前にて、登山者に伝書鳩を有料で貸し出した。

鳩協会に関する資料は、旭夫氏のご子息である三田啓一氏より昨年大町山岳博物館に一括して寄贈いただいている。

(注二) 伝書鳩：通信に利用するためドバトから改良した鳩。よく発達した帰巢性を利用し、交通不便な土地からの通信に多く用い、また軍事的にも使った。飛翔速度は一分間一キロメートル。(「広辞苑」より)

訃報 大町山岳博物館顧問の丸山彰先生が平成十一年七月十二日に逝去されました。享年82歳でした。大町山岳博物館はもちろん、地元大町市の振興に大きな功績を残した先生を偲んで、そのご活躍とお人柄を紹介いたします。先生のご冥福をお祈りいたします。

お別れの言葉

相模 一男

故・丸山彰先生へのお別れにあたって、心から哀悼の意をささげます。

顧みれば先生は、大正六年七月十二日のお生まれ、奇しくも満八十二歳の生涯でございました。先生が、小学校三年生のとき、冬の針ノ木岳麓川谷で、あの早稲田大学山岳部の雪崩遭難事件が起きました。当時の大町だけでなく日本中を騒がせる歴史的な遭難、その救助出動の様子を、先生は鮮明に記憶してお

られました。この事件が、後の先生の人生を山と結び付けることになったのでしょうか。

爾来、山に惹かれた先生は、大町中学校時代、平小学校代用教員時代はもちろん、早稲田大学高等師範部を経て、ふるさとの岳都・大町にお戻りになって大町中学校（現在の大町高校）教諭に着任されてからも、山への思い入れは増すばかりでした。

終戦直後の昭和二十一年の夏休みには、大町五年生の有志を連れて鹿島槍ヶ岳に登山、翌々年の二十三年



故・丸山彰先生
1992年6月25日 スイス・ベルンにて

には、全国でも初めてという全校登山を提案、実行されたのです。先生が創始された全校登山は大町中学校、大町高校を通じる伝統となり、五十有余年後のこの夏も、大町高校の健児たちによって意気高らかに続けられております。

その全校登山の歩みを、きたる平成十三年の学校創立百周年にあたって、ぜひ全国に紹介したく、われわれ同窓会の有志はただいま検討を続けております。創始者たる丸山先生のお名前を高く掲げねばなりません。

先生はまた、同じく昭和二十三年、中信高校体育連盟のスキー講習会をも創始されました。これまた今も続けられている行事で、先生はまことに、山とスキーの分野で健全な精神とスポーツ振興に尽くしていただいた方といえましょう。

その後も、大町山岳博物館の創設に尽力され、大町市に県山岳総合センターを設立するにあたっても中心的なお立場で奮闘されました。また、今に残る大町市史の編纂では、山岳とスキー部門を執筆担当されました。その他、日本山岳会々員、環境庁自然保護指導員、大町山岳博物館顧問、大町市及び大町商工会議所の結婚相談員を歴任されるなど、多くのご功績はひと口に語れないほど大きなものがございます。

ここに謹んで敬意と感謝をささげます。

丸山先生は、多くの著名な方々との親交が厚く、この人たちと山と自然、わが郷里との携わりを深めてくれた仲介役としても、長く記憶にとどめられるべき方でありました。詩人の尾崎喜八さん、登山家横有恒さん、登山家でもある作家の浦松佐美太郎さん、そして日本百名山の深田久弥さん、関燕の笹川早雄さん、山岳画家の山川勇一郎さん、山岳写真家の風見武さん、田淵行男さん……

また地元では北アルプス登山開祖の一人である大先輩の百瀬慎太郎さん、平林武夫さ

ん、そして法政大学教授でオーストリアスキーを日本に紹介、普及に努められた福岡孝行先生……。特に福岡先生と丸山先生は共に北アルプス山麓のスキー場開設に大きな足跡を残されました。今日の八方、鹿島槍のスキー場も、歴史をひもときば最初のページで、適地を求めて現地を歩き、地元で指導を続けてこられた先生方のご努力を見いだすのであります。

このように、先輩、友人、師弟を問わず、丸山先生の人脈は厚く、多くの人達が先生をお慕い申し上げておりました。

私は、そうした人達との出会い、語らい、山と自然との出会いを一冊の本にしていただけでしたが、と先生のご執筆を願いつけて参りましたが、叶えられず、まことに残念でございます。しかし、多くの貴重な記録が残されておること、出版を願う人達の手で悲願達成を、となお望むものです。

丸山先生。今日までお与え下さった数々のご教導、思い出は尽きません。このうえは、残されたご家族へのご加護を願ひ、お心安らかに眠り下さい。

心からの感謝をささげ、ご冥福をお祈り申し上げます。さようなら丸山彰先生

【告別式弔辞より】
(丸山彰先生をお慕いするひとりとして)

山と博物館 第44巻第8号
発行 千〇〇〇 長野県大町市大字大町八〇五六―一
306 市立大町山岳博物館
TEL 〇二六―一三二〇一一
FAX 〇二六―一三二〇一一
印刷 奥村印刷
定価 年額一、五〇〇円(送料別)(切手不要)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七―三三九三